「読む」ことと「書く」ことの学習

山本義美

(一)

現代国語の学習指導の中から、特に読解学習と表現学習を相互に関連させた指導について、実践例をもとにまとめてみたいと思う。

新指導要領には、この相互関連学習に意を用いるよう強く求められているが、このことは必ずしもこの度事新しく提唱されたものではない。一領域のみの学習では、効果があがらないことは多くの先輩たちの繰り返し指摘されているところであって、現在わたしたちの営む国語教室においても相互関連学習は実践されていることである。「読むために書く」「書くために読む」など相互に関連させての実践例は多く報告されており、その意味から言って、わたしのこのまとめも、言い古され実践し尽くされたことであり、今更の感は強い。

読解学習と表現学習の関連学習とは言え、わたくしの場合は、どちらかと言えば、「読むために書く」指導に重点がかかっていたように思う。

わたくしは昭和三十八年以来、現代国語の指導法として、課題学習による方法をとっている。課題学習のことについては、今更説明を要するまでもないが、わたしにとっては、この課題法が現国の指導法として最もなじんだ方法である。課題学習は学習目標をはっきりさせると同時に過不足のない指導事項を押さえることができて都合がよい。現代国語は何を教えてよいやらわからないなどの嘆きを耳にすることがある。しかし、学習目標がはっきりしておれば、その嘆きもなくなるであろう。「課題」は学習指導の計画図である。

課題学習の意義を特に「表現」に限っていうなら、次のようになろう。

1　表現力を高めることができること

課題の解答はほとんど文章表現によるものであり、簡潔かつ文意の明確なものが設定される。解題そのものが表現力を高める。

2　記述力を養うことができること

設問の意図に応じた解答を文章化、それを模範解答例と照合することによって、より的確な記述力を養うことができる。

3　作文力を向上させることができること

明確な表現力、論理的な記述力を養うことは作文指導の主要な柱である。設問解答作成の過程の中で、豊かな表現力と正確な記述力の基礎を培い、作文力向上に役立たせることができる。

(二)

読みの過程における書く学習は、文章を深く理解するための一つの手だてとしての学習である。つまり、直接の目的は読むことにあ

る。読むにしても、書くにしても、その学習相互には何らかの必然的なつながりがなくては効果はあがらないものである。目的をもった一つの過程の中での学習であって、その場の思いつきによる関連や、一つのパターン化された関連学習というものは、その効果を半減させるだけでなく、時には逆の効果が現れたりもする。

次の表は昭和五十三年度の指導の中の、表現に関する主たる学習事項のまとめである。今から思えば、各教材の中での関連性はあるにしても、各教材間の有機性、関連性は乏しいと思う。学年当初の早い時期に年間の計画表を作るべきであったと反省している。

表

単元名	教材	読解と鑑賞の過程における「表現」に関する主な学習事項
評論	自己について　矢内原伊作	1 「人生論」に関して読んだ書物や聞いた話の印象をまとめる。「幸福」とは何かなど。 2 形式段落を意味段落にまとめ、要約する。 3 「自己を棄てることは、自己を獲得することである。」（主題）について考え、意見を書く。
評論	ものをそれ自体として見ることがなぜ必要か　田中美知太郎	1 本文の内容に対する自分の意見を書く。 2 段落の見出しをつける。 3 各文節相互の関係を図示する。
小説	アルプスの少女　石川　淳	1 初発の感想を書く。 2 描写の美しいところを抜き書きし、情景を想像してくわしく書く。 3 段落に分け、分けた理由を後から説明できるように書く。 4 石川淳の作品（七編の童話）のうち一つを選び、この作品と共通する思想をまとめる。
小説	山月記　中島　敦	1 初発の感想を書く。 2 段落に分け、内容をまとめる。 3 李徴の性格の説明にあたる部分を抜き書きする。

			4 李徴が虎になった理由を考え、意見を書く。 5 作者の人生観や思想についてまとめる。 6 印象に残った表現を抜き出す。その効果についてまとめる。 7 自分の中にもある李徴の性格を具体例に基づいて、作文する。題「私」
詩	秋の祈り	高村光太郎	「秋の祈り」に託された作者の中心的な心情をまとめる。
	竹	萩原朔太郎	「秋の祈り」の行末と比較し、その効果についてまとめる。
	小景異情	室生犀星	作者のふるさとに対する心情についてまとめる。
	犬吠岬旅情のうた	佐藤春雄	テーマ文を抜き出す。
	旅程幻想	宮沢賢治	作者の心の中に浮んだ幻から作者の心情をまとめる。
	詩人との出会いと別れ	高橋和巳	補助教材を含めた作品の中から一つを選んで鑑賞文を書く。
随想	飛天	福永武彦	奈良の写真を見て、古い時代の奈良について心のおもむくままに想像して書く。
	知魚楽	湯川秀樹	論理の矛盾を指摘する。各段落の要約文を書く。
短歌と俳句	短歌の鑑賞	木俣　修	1 好きな短歌一首を選んで鑑賞・解説文を書く。
	秋の夜（短歌十五首）		2 短歌を転写する。
	俳句の鑑賞		3 好きな俳句一句を選んで鑑賞文を書く。
	連山（俳句十五句）	加藤楸邨	
評論	移動の時代		1 自らの身辺にある「移動」について考え、実例をあげて作文する。 2 段落の要点をまとめる。 3 全体の要旨をまとめる。
小説	こころ	夏目漱石	1 「こころ」全編を読んで感想文を書く。（冬休み課題） 2 「先生」または「K」の人柄や自殺について、考えをまとめる。 3 特異な比喩表現による心理描写を抜き出す。 4 印象に残った表現を抜き出す。
	朝めし	スタインベック	1 初発の感想文を書く。

		2　自然描写の文を抜き出す。 3　自由作文　題「忘れ得ぬことば」
日記	みづの上日記　樋口一葉	1　一葉の人柄についてまとめる。 2　一葉あての手紙を書く。

（三）

わたしは普通、読解の過程を三つの段階に分ける方法によっている。すなわち、通読の段階、精読の段階、まとめと発展の段階の三段階である。以下それぞれの段階に行った学習事項と実施するに当って意を用いた点についてまとめたい。

(1)　通読の段階におけるもの

この段階では「あらすじ書き」や「初発の感想文書き」が主なものである。

(ア)あらすじ書き

この学習には、要旨を書く、要約する、段落をまとめるなどの学習が含まれている。非文学教材、文学教材などによって、学習事項をかえる。

生徒のあらすじ書きは一般的に下手である。次の例などは、全体像がつかまれていない例である。

山月記あらすじ　　男

ある日李徴が虎になってしまった。袁傪という人は李徴の親友で、まさか虎になっていようとは思っていなかったであろう。ある日旅をしていると虎になった李徴がいた。会話していると、何やら虎になった話をしていた。李徴は自分の姿を見られたくなかったが、妻子のことを頼んでから姿を見せておらなくなった。

山月記あらすじ　　女

李徴は詩家となって名を遺そうと官を退いたが貧窮のため、官にもどったが、俊才の李徴は自尊心を傷つけられ、ある日公用の旅で発狂した。その後の李徴の行方は不明だった。ある日袁傪という者が旅の途中で人食虎の出るところを通ったところ、友達の李徴の声がした。話を聞いてみると、李徴の体は虎となっていた。そして袁傪に詩を伝録してもらい、妻子のことを頼み、二度とこの道を通らないでほしいと言って別れた。

あらすじ書きは、ただ長い文章を短くすればよいというものではなく、重要なところを落さずに書くことが求められる。書く必要のあるものを要約して書くことは、作文の基礎訓練にもなると同時に、内容探求の手がかりをつくることにもなる。あらすじを書いて、全体像をつかむためには、構成とか要素に注意して書くよう注意を与える。「山月記」の場合などは「起承転結」に分けて書くとよいようである。

(イ)　はじめの感想文

あらすじ書きについで、この段階では初発の感想を書く学習がある。もちろんあらすじ書きと初発の感想文を同時にはできない。時間的にいって余裕がない。初発の感想は、非文学的教材、文学的教材いずれであっても、書かせるようにしている。一読後、深く内容をつかまぬままに書くために、断片的な感想になったり、形式的な感想になったりするが、書く視点を指示することによって独創的な感想をまとめさせることができる。次の感想文などは独創的なものであろう。

「アルプスの少女」を読んで　　女

読み終わったとき、私は作者に対する憎悪の念でいっぱいになった。小さい頃からの一番の愛読書であったスピリ夫人の「アルプスの少女」は今でも、その扉を開くことによって私を夢の国にひきずり込み、自然の園に遊ばせてくれる。そこには澄み切った空気が流れ、もみの木がさわさわと揺れ、暗い影などひとつもなかった。石川淳は、この本を「筆まめの作者が絵本に仕立てて売り広めた。」といやしめ、おまけにその後日談として、スピリ夫人のものとは全く正反対の醜悪な戦争というものをくっつけている。スピリ夫人のものは平和の象徴、石川淳のものは醜悪の象徴のような気がする。

しかし私はふと私のアルムじいさん、ハイジに対するイメージが少しも崩れていないことに気がついた。戦争が起こらないころのフランクフルトでさえも、生きていくことが困難になったハイジにとって、戦争の起こった世界ではどうしても生きていくことができるはずがなかった。それは工場の煤煙の中では咲けない白い花のようなものだった。新聞記者がとった写真に写っていた白い花はハイジの本当の姿だったのだ。ハイジは写真などには写らない。読者の心に浮かぶハイジはそのまま心の写真にしか写らないのである。

作者が平和のままで終わらせられなかったのはそれで終わらすことのできない何かがあったのだ。現にクララは平和な山の生活が気に入っていながら、山を降りた。山を降りたクララは作者自身であったと思う。クララに山の下の土を踏ませたかった足は作者自身であったのだ。世界は平和だけではない。スピリ夫人の「アルプスの少女」は、夢の国の話なのだ。実際には起こらない。

ハイジとアルムじいさんが、実際に登場しなかったのは、私たちのイメージをこわさないためのみならず、実際にハイジとアルムじいさんは戦争の醜悪な世界には住めなかったのだと思う。ハイジは、アルムじいさんは、山の下の世界が再び虹のように美しくなったとき、世界中が平穏で満ち足りているときっとまた戻ってくるであろう。クララ、ベーターそして皆の手で、ハイジを山に呼び戻さなければならない。

多少、ひとりよがりな所があり、美文意識が伺えないでもないが、独創的な感想文だと思う。このときは「視点」として、反撥や同情を感じるところ、わからないところを中心に書くことを指示した。

いうまでもなく初発の感想文は断片的形式的であってはならない。しかしいわゆる読書感想文とは異ることに留意する必要がある。作品主義の立ち場から見て価値なしとされてもそれはそれでいいと思う。もともと初発の感想文は読むことの補助的意味があればよいのである。読書感想文指導とは異った指導が必要であって、形

式にこだわることは避けたい。要は感想が豊かであるかどうかが問題である。気軽く書かせるようにしたい。気軽く書かせるために私は西洋紙四分の一に書かせるようにしている。原稿用紙に書かせると、変に身構えたり、抵抗を感じて、十分に書けない場合が多い。初発の感想文には、それとしての目的がある。目的をはっきりしないと本来の作文学習と混同してしまうことになる。形式はとわないことにする。次の例などは形式的には整っていない初発感想文である。

「アルプスの少女」について　　女

「山の世界」とは実際には存在しない夢のようなものと考えたら（対比）

「もう一度あたしたちの手で山の下の世界に、あの虹のように美しい町を造らなくちゃ。

ハイジが写真に写らない。

アルムじいさんが消える。

ハイジとアルムじいさんが登場しない。

虹というものは美しいが実は光が水蒸気に反射しているだけ。町は現実にあるもの。だから「虹」ではなく「虹のように美しい町をつくらなくてはいけない」と作者は言いたいのであろう。

当然のこと。ないものが写真という光の反射を感光フィルムに焼きつけるものに写るはずがない。

これも当然のこと。ないものが消えたって不思議はない。

ないものが登場できるわけがない。ハイジは美や平和や他のあらゆるよいものの象徴であるが、実際にはないのだから花や虹のようにあることはあるが「ある」とはっきりしないものに化けるのです。

これは現実の象徴。クララは夢の世界から現実に戻ってその厳しさに参りながらも本当の平和と自由を勝ちとるために新しく出発するのです。

型破りの初発感想文である。「アルプスの少女」は、解る生徒には一読してこれだけのものが書けるが、解らない生徒には全く解らない教材である。

(2) 精読の段階における表現学習

精読の段階における表現学習は全体にわたるといってよい。わたしは「こころ」の学習に次のような課題を用意した。

小説「こころ」学習資料（抜粋）

一、「寒い雨の降る日」「初冬の寒さとわびしさ」「空はまだ冷たい鉛のように重く見えた。」などの表現から受ける印象を書け。

二、「急に不愉快になりました。」「どこへ行ってもおもしろくないような心持ちがする。」それぞれの理由を説明せよ。

四、Kからお嬢さんに対するせつない恋を打ちあけられたときの「わたし」の心理をどのような比喩によって表現しているか。

六、二一二ページ下から二一三ページ上にかけて、闘争的なことばが見立っている。それは「わたし」のKに対するどういう意識の現れか。

八、「わたし」は彼の姿を咀嚼しながら正月の町をうろつくが、そのとき「わたし」はKに対してどんな気持ちを持つに至ったか。

焼け跡の砂

一六、「わたしはKより先に、しかもKの知らない間に事を運ばなくてはならないと覚悟を決め」るまでの過程を表現に即してまとめよ。

一七、次の「なんにも知らない」の意味はそれぞれどのように違うか。

1　「なんにも知らないお嬢さんはわたしを見て驚いたらしかったのです。」

2　「なんにも知らないKはただ沈んでいただけで、」

3　「なんにも知らない奥さんはいつもよりうれしそうでした。」

一八、「わたしは鉛のような飯を食いました。」という表現は「わたし」のどのような心情を表しているか。

二五、「『明治の精神に殉死』」の「明治の精神」は「こころ」の場合に即して言うならば、どのような内容を持っているか。

設問二は、つぎたての炭が暖かそうに燃えているKの部屋と、冷たい灰が白く残っているわたしの部屋との対照的な表現を押さえさせる。

設問四は、堅いものでわたしの心理を表す特異な比喩表現に注意する。六は重要語句、八は要約の力をつけるための設問である。一七は一種の文体学習である。一七、一八は心理描写である。

ここに抜粋した設問のねらいは、それを表すのに必要なことばを見つけ、要約することによって自らの考えをはっきりとさせる本来の作文学習の基礎的な学力をつけることにある。

非文学的教材においては、文章の構想を図式化することによって、文章の組み立てを工夫する力をつけたり、中心的な論述と付加的説明、事実の説明と筆者の意見を区別することによって、作文学習の基礎的な技能を養う設問が用意される。

(3)　まとめと発展の段階の表現学習

まとめと発展の段階の一般的な学習事項としては、意見や感想を書く学習が考えられる。これは一種の創作学習であり、通読段階における感想やあらすじ書きより更に深く、個性的なものである。筆者の考え方や主人公の生き方に対する同意や反撥を自らの生き方や考え方と対比しながら書くことになり、それらと対決する中で、主体的な批判的な態度が養われ、思考を練る訓練が培われる。書くことによって自己を発見する。筆者または主人公に対する手紙という形をとると書きやすいようである。

「こころ」読後感（抜粋）　　女

しかし、先生、私はあなたを非難しません。あなたが友人の死を発見し、人に知らせる前に夢中で彼の遺書に目を通し自分を守ろうとなさったことをも含めてです。一体、誰にあなたを非難できるというのでしょう。何故ならあなたの友人の純粋な思いも愛ならば、あなたの行動もやはり愛。あなた自身への自然な思いやりだから。やり方が汚ないかも知れません。決してきれいではありません。でも人間追いつめられた時に守るのはやはり自分ではないでしょうか。まして、先生、あなたは傷ついた心、寂しい心を抱えた人です。結果的には取り返しのつかないことをしてしまったでしょうけれど、結果は問題ではなく、そこに至るまでの過程を私たちはしっかり見つめなければならないはずです。だからこの自己防衛の行為は、自然な気持ちであって、恥ずかしいことではないのです。先

生、あなたは悪くない。それ以上寂しい思いをするのが恐くて、お嬢さんをどうしても離したくなかっただけ。追いつめられたあなたの心が私にも解るというのは慰めにしかなりませんか。でも解るような気がします。私もやはり人間で、一つの心があって、「愛」も私の中にあるはずだから。

利害を考えての愛ではなく、正直な気持ちで生きた先生。人間を憎んでいると言い、深く心を閉ざしたまま最後に一人の青年にその心を開いたあなた。愛して再び傷つくのが恐かったのでしょうか。

現代の私たちが先生を理解するには余りにも幼すぎます。時代も違いすぎます。でも人間の心はいつの時でも、そう違いのないはずのもの。例えるなら海——先生の苦悩に満ちた生涯。大きく波うち寄せては返し、静かに激しくそして優しく何かを語りかけてくれるようなあなたの生き方を私は忘れはしない。きっと誰よりも愛を求めていたに違いないあなた。先生、あなたという方は、涙が出るほど真剣に生きた、人間らしい人でした。

女

山月記を読んで(1)

私は、李徴のもっていた性格、すなわち、臆病な自尊心だとか、尊大な羞恥心は、一般的な人間ならば、誰でもが、心のどこかに、多かれ少なかれ必ず持っているものだと思う。けれどもそれが、李徴の場合は、若い頃から博学才頴で、世間の人々にもてはやされていたから、私たちのような平凡な人間よりも、強くなっていったのだろうと思う。けれども私には、この作品を読んで、李徴を非難することはできない。なぜなら、それは、人間の本能のようなものであり、私も、李徴のような性格を持っているから。例えば自分には、本当はそんな才能のない事はわかっていても、もし、「あなたの絵はすてきね。」などと言われれば、うれしいけれども、それを専門家には、あまり見せたくないという心が起こってくるに違いないから、本当はそういう自分より上の人の忠告や注意を受ければ自分が成長するという事はわかっていても、専門家に見せて、その絵をけなされたり、非難されたりして、他人に自分の才能のなさ等を知られ、低く見られるのを恐れる。すなわち、それは自分の為にならない羞恥心であり、自尊心だから。

また、私は李徴の生き方についても、悪いとは思わない。むしろ、自分のめざすものに向かって必死にぶつかるということは良い事だと思う。私も、これから先、やっぱり李徴のように、自分の「これ」と思った事を精一杯頑張ってやりたい。けれども、その時、見栄などにこだわることなく、長い広い目で、心で、物事を考え、行動するようにしたい。

男

山月記を読んで(2)

この小説は人間が虎になるような決してあり得る話ではないことが書かれている。けれども、これは読む人に全然違和感を感じさせない。むしろ本当にあり得る身近かなものとして感じさせる。それはなぜだろうか。おそらく、実際にだれでも人間であるならば、李徴が持っている臆病な自尊心とか尊大な羞恥心を少なからず持っているからではないだろうか。李徴ほど際だったものではないにしても、そして普通人間はそんな性情を制御しながら生きていくが、李徴はふとしたことから破滅してしまう。否、李徴にしてみればふとしたことではなかったのだろう。

そもそも、私は李徴の詩に対する異常なまでの執着に驚かされる。芸術家と呼ばれる人は皆、そういうものなのだろうか。李徴の場合は、その執着があまりにも強かったために人間的な心の欠如へとつながったのだろう。

李徴の最大の不幸は、人間でなくなって始めて自分というものに気がついたことであろう。そして人間でない身体に人間の心が宿っていることではないだろうか。でも哀惨に自分の心をすべて出し尽くした李徴は、もう二度と人間の心をとり戻すことはないような気がする。それは確かに虎としての李徴にとって幸せであろうか。妻や子、友人をそれとも知らず食べてしまうかも知れない。それが幸せだろうか。李徴をあわれまずにいられない。でも、李徴をあわれんでばかりもいられない。誰でも李徴のように虎になる可能性が全くないとは言い切れないのではないだろうか。

ここに引用した「こころ」の読後感も、「山月記」感想文も、「よみの深さ」を確めるものであって、決して、この読後感なり、感想文を「書くために読」んで来たものではない。その意味では、読解学習過程の最後のものではあっても、またいかに創作性を含んだ作文活動に見えても、目的はやはり読みにあり、読後感を綴る作文活動は読解学習を達成するための補助的な活動でしかない。

とはいえ、いわゆる作文学習に時間の充分とれない教室にあっては、提出された読後感想文を材料に作文学習をするよりほかない。読後感想文を添削することは、読解学習の妨げになると言われてはいるものの、少くとも形式的な面、技能的な面については、朱を加えておくことにしている。もちろん、初発感想文においては、内容、感想の豊かさに重点を置き、誤字、脱字、文のねじれなどに気がついてもチェックにとどめている。

「こころ」の読後感においては、次のような点を指導した。

1　「〜ではないでしょうか。」といった反語とも問いかけともつかない同じ文形が多い。これを他の文形に改めるとよい。

2　「あなた自身への自然な思いやりだから。」「『愛』も私の中にあるはずだから。」のような倒置表現が多い。あまり多いと「きざ」な文章になる。

3　体言止めが多い。いわゆる「余韻」「余情」をかもすとはいえ、あまり多すぎると、舌たらずの感を与え、鼻につく文章になる。

また、「山月記」の感想文(1)においては、「けれども」の多用を注意するよう指摘するにとどめた。「山月記」の感想文(2)においては、接続詞及び、文末に注意するよう指摘した。

今後の課題として、「書くために読む」学習法を実践してみたいと思っている。

（兵庫県立西宮今津高等学校教諭）